

「北陸の工芸さまざま」—新潟・富山・石川・福井—

日本大学芸術学部美術学科 教授

大熊 敏之 氏

## 1. 工芸とは何か

工芸とは、人間の手によって工芸の材料と技術を用いて作られた器物全般のことであり、工芸の基本は、生活の役に立つ「器」ということになる。器というのは、壺などのように何かを入れてためておくための物であったり、何かを煮るための調理器具であったり、飲んだり食べたりするための飲食器であったり、意外なところでは箆笥など衣服をはじめ様々な品物をしまっておくための器なども含まれる。また、ちょうちんは明かりを入れる器であり、仏壇は仏様を収めるための器である。では、金箔や紙はどうかというと、金箔は箱を包んでいるし、紙は絵や文字を収める器だと理解できる。そこに美が加わり、中に収める物を入れなくても美しいということになると、芸術品として鑑賞の対象となる。



工芸は種類別に大きく七つに分けられ、さらに大別すると「やわらかもの」と「かたいもの」に分けられる。「やわらかもの」は自然物をそのまま素材にしており、素材が軟らかくて加工しやすいもの、「かたいもの」とは素材を加工して作り上げられたものである。

「やわらかもの」の一つ目は、木工・竹工である。割ったり削ったり曲げたりくっ付けたりして形を作る。例えば、色合いの異なる木材を組み合わせて作る箱根細工や、お茶で使う茶せん、竹を編んだ籠や花入れなどが含まれる。

二つ目は漆工芸である。基本的には木や竹で物の形を作り、その周りを装飾する手法である。

三つ目は染織である。植物性または動物性の繊維を用いて布を作り、糸や布の段階で染めていく。なお、絹糸は蚕が吐く糸から作られるから動物性繊維と思われるかもしれないが、実は蚕が食べた桑の葉のセルロースが基本の材料なので、いくら昆虫が吐いても動物性ではなく、植物性繊維である。

一方、「かたいもの」の一つ目は、陶磁器（焼き物）である。「陶」は、土を使って粘土を作り器の形にしたもので、土物と呼ばれる。「磁」は、硬くて白い石の崖を掘って割って、粉にして粘土にして作るため、石物といわれる。どちらも一度焼いて形を作らなければならない。そして、窯の中で焼いているときに人間が 100%コントロールすることができない。偶然が大きく影響するという性格がとりわけ焼き物は強い。

二つ目はガラスである。まず自然物の中にガラスそのものは存在しない。石英などの成分を含んだものを溶かして不純物を取り除き、ガラスという人工物を作り出す。ガラスは非常に不思議な素材で、一般にガラスは固体と考えられるが、実は正確には固体でも液体

でも気体でもない。金属の場合、熱すると液体に変わるが、必ず結晶構造は保ったままであり、それが冷えると結晶構造がくっ付き合っ固体になる。しかし、ガラスは結晶構造を一切持たない。極めて液体に近い固体的性格を持っているが、どちらともいえない。そのため、われわれは俗に「ガラス体」と呼んでいる。

三つ目は、金工である。ガラスと同様に、自然物から取り出して不純物を除いて精製し、材料を作るところから始めなければならない。江戸時代に作られた京都祇園祭の鉾の飾り金具を見ると、非常に緻密な彫金技術が用いられている。この技に近いものがやがて金沢に伝えられた。金属は叩けば延び、軟らかくなる性質を持っている。あまり叩き過ぎると、破断といって耐えられなくなって割れてしまうが、割れる前に火入れをすると軟らかくなる。つまり、金属の性質をアメとムチの技法でだましまし作るのが金属工芸だといえる。そして、金工と一口で言っても、金属を彫り刻むなどさまざまな技法が存在する。

四つ目は、七宝である。漆と同じように金属工芸の表面を飾る技として独立していった。その表面はガラスと性質が同じものである。

## 2. 工芸品が生まれた背景

さまざまなジャンルや技法、材料を使った工芸品がこれほどまでに豊かなバリエーションを持ち、かつ質の高いものが作られるようになったのは、平和で豊かな時代が長く続いたからである。逆に言えば、平和で豊かな時代が長く安定して続かない限り、工芸は発展しなかった。なぜなら、一つの工芸技術が確立して成熟するには相当な時間がかかり、その技を次代に引き継ぐにも相当な時間が必要だからである。さらに工芸品は、いつの時代も商売の材料となって経済を活性化してきた。そのためには平和でなければならなかった。

特に日本の場合、桃山時代から江戸時代にかけて初めて、工芸が安定した形で全国に展開した。なぜなら、この頃に各藩が成立し、幕藩体制が盤石なものとして形作られていったからである。藩というのは、いわば小さな国家である。日本が一つの国家にまとまったのは明治時代になってからであり、それまではイタリアのように小さな国家が集まった連合体だった。そのため、各藩で流通するお金も異なっていた。そうすると、一つの藩内で経済を活性化させ、領民たちが豊かに暮らしていくためには、外貨を獲得しなくてはならない。そのために最も商品として動いたのが、実は地域工芸品だった。自分の地域に他と違う素晴らしいものがあることで外貨を得ることができるのだから、差別化をどんどん図っていかねばならない。そのために新製品や新技術が次々と生み出され、多様な工芸品が生まれたわけだ。

例えば焼き物一つをとっても、桃山時代に織部といわれる陶器が作られた地域はごく限られていた。一方、別の地域では、長石釉を使って全体を白くする志野焼や萩焼が生まれた。土の質や流通する釉薬の手に入りやすさ、入りにくさなどの地域特性やさまざまな工夫から、色合いの異なるものが桃山時代から江戸時代にかけて各地の特産品として作られていった。

さらにいいものがどんどん作られるようになると、作り手には欲が生まれる。一般に工芸品や工業製品はどのようなコンセプトの下で作られているかというと、消費者からすれば使いやすいものを作ってくれていると思うだろうが、作りやすいものを作っているというのが作り手の本音だろう。最も無駄がなく、苦労のないものであり、その上で使う人が使いやすいければさらにいいというのが、大量生産品のコンセプトである。

しかし、並の普及品よりもすごいものを作りたい、自分にしかできないものを作りたい

という欲が作り手に出ることもある。例えば、江戸中期から後期にかけては、武士であっても実際に刀を使って戦うことがなくなり、刀は一種の装飾品になっていった。それに伴い、実際に用いるにはどう見ても使いにくそうな精緻な装飾を凝らした刀のつばなども見られるようになった。そのような技術が進んだのも、全ては安定した世の中が続いたからだといえる。

### 3. 風土と工芸

北陸の各地域では、工芸品にどのような特色があったのか。気候風土や文化によって各地域なりの工芸が見られ、それぞれに特殊性や特色がある。材料の入手しやすさや材料を現地で採っているかどうか、技がいつ、どこで始まってどう伝わったのかによって在り方は随分と変わってくる。例えば、珠洲市では珪藻土の商品が盛んに作られているが、はやっているからといって富山や福井で作れるかといえば作れないだろう。なぜなら、材料が採れないからである。

また、一般には、技術が伝わったり、物が運ばれていたり、何かの行事が各地に根付いたりするときに、日本海に面した地域では北前船が非常に大きな役割を果たしたと考えられており、それは間違いではない。ただ、ある工芸ジャンルがある地域で展開する上で北前船が影響しているかということ、そうとも言い切れない。

その一例が、新潟県村上地方に伝わる村上堆朱（ついしゅ）という漆工芸である。本物の堆朱（堆刻）は、漆を何百回と塗り重ねて固まった厚い層を浅く深く彫って作ったもので、室町時代に中国から多く入ってきた。最初は足利家が独占して中国へ注文していたが、時間と金がかかるため、日本で作られるようになった。ただし、日本で作られた堆朱は、中国と作る過程が異なる。出来上がった瞬間に堆朱に似ていけばいいので、厚い板を深く浅く彫ってから全体に均一に美しく漆を塗る工程で作られている。その一つが新潟の村上堆朱であり、他に高岡や輪島、鎌倉でも作られている。

では、村上と高岡や輪島、鎌倉の堆朱はそれぞれ関連があるのかということ、実は全く始まりが異なる。村上堆朱は、室町時代に京都の寺社仏閣の技術者が村上に呼ばれた際に伝わったものだ。高岡のものも京都からの技術移転で、村上とは関係がない。そして鎌倉は、室町時代に中国から伝わったものが直接関東地方に持ち込まれ、同じようなもののできないかと考えて作られたもので、京都とすら無関係である。従って、堆朱に関しては日本海が文化の伝承に役立ったわけではなかった。

### 4. 北陸地方の工芸

新潟では、北陸地方の中では最も早く、8 世紀ごろから染織が展開された。特に麻が採れやすく、越後上布、小地谷縮、小地谷紬などが作られた。絹では本塩沢、塩沢紬、十日町明石ちぢみなどが有名である。十日町紬もあるにはあるが、現在は廃絶寸前である。しかし、新潟の織物は、全体的に非常に肌触りが滑らかで通気性に優れており、これらが主力産業となって江戸に送られていた。

だが、新潟全土で織物が盛んだったかといえば、そうではない。新潟は横に細長いので、地域によってさまざまな工芸品が作り出されていた。岩船地方では村上堆朱が展開する一方、燕では金属工芸の和釘や鋤起（ついき）銅器が生産されていた。現在の燕地域では、爪切りが世界的にヒットを飛ばし、iPad の鏡面仕上げを世界で唯一担っている。また、身体障害者専用カトラリーも世界で人気の商品となっている。柄の部分等特殊な樹脂となっ

ていて、お湯につけて樹脂を軟らかくし、持ちやすくした状態で水につけるとその形がキープされるものである。これも元々は高度な金工技術が伝わっており、それが基盤となっていたからこそ生み出された。

また、佐渡では金山跡地の陶土を使った「無名異焼」が生み出され、今日も作られている。鉄分を含んでいるため、焼くと化学反応を起こして真っ赤になる焼き物で、装飾の仕様がなく、非常に地味な焼き物である。また、佐渡では佐渡蠟型鑄金も始まった。柏崎、直江津、長岡で起こった金属の鑄造技術が佐渡に渡って始められたもので、佐々木象堂などの作家も現れている。

一方、その対極に当たるきらびやかな工芸の要素がほぼ全部出そろっているのが石川県である。加賀前田家によって公金を使って優れた職人を登用し、職人同士を競わせることもよく行っていたという記録が残っている。その根底には、京都への強烈な憧れが見られる。金沢では、染織は加賀友禅、漆は金沢漆器、金工は加賀象嵌など、手が込んでいる工芸が多い。前田家は加越能の領地内で、各分野の優れた工芸家に命じてサンプル品を作らせた。これを「百工比照（ひゃっこうひしょう）」という。金銀や漆がふんだんに使われ、贅を尽くされたものがよく見られる。

加能地区では、輪島塗、山中漆器、九谷焼などがある。輪島塗は金沢と同じ系列にあるので、同じようなきらびやかさを持っている。一方、九谷焼は装飾性が強いが、色合いがやや重めである。九州の有田焼を学んで作り始めたのが古九谷だが、湿度が多い土地であるため、窯の焼成温度を上げようとする割れてしまい、釉薬の発色が鮮やかにならなかった。そのため、九谷特有の重みと味わいのある色合いが生まれ、有田焼とは全く異なる性格のものが展開した。他にも能登上布や牛首紬があるが、同じ織物でも新潟と性格が異なり、素材そのものよりも表面の染色で勝負している。このように同じジャンルの工芸でも、風土の違いや文化的な違いが明らかである。

福井では、庶民のための工芸を中心に発展した。そのため、石川や京都と比べると随分地味な印象となる。越前和紙、越前漆器、越前打刃物、越前焼など、腰が強くて堅牢、実用性重視といった特徴が見られる。例えば越前焼は、無明異焼よりも素朴な焼き物だが、それは土の関係で素朴にしか作りようがなく、装飾を施すことも考えられないものだったからである。

若狭には、若狭塗とめもの細工が存在する。特に若狭塗は江戸時代、変わり塗りの技法で松葉や金箔、貝、卵殻を入れて、研ぎ出しの文様を作る手法を編み出した。これと津軽塗は親戚関係にあり、北前船がかなり影響している。

## 5. 富山の工芸

金沢のきらびやかさ、新潟の多彩さ、そして福井の実用性と地味さに挟まれた越中は、どのような工芸が発展してきたのだろうか。藩の庇護を受けて作られていたものとしては、杣田（そまた）細工といって、青貝を使って装飾した漆工芸や越中丸山焼ぐらいしかない。しかし、民間ではさまざまな工芸が栄えた。例えば越中瀬戸焼や小杉焼である。特に小杉焼の鴨徳利は今でも高値で出回っている。それから城端塗、高岡漆器、高岡鑄物、井波彫刻、今ではほとんど廃絶してしまったが福野縞や福野緋などがあり、城端絹はかつての勢いはないが、現在は女性経営者がコサージュなどを作って売り出している。こうした工芸が江戸時代に各地で盛んに生まれた。

その中で一番の隆盛を誇っているのが高岡の金属加工業である。今日では高岡銅器と呼

ばれているが、現在の一番人気は純錫で作った、曲がる器だろう。では、なぜ高岡銅器というのか。実は、高岡銅器では最初から銅器を扱っていたわけではなく、元々は鉄を扱っていた。17 世紀初め、前田利長に招かれて有力鋳物師 7 名が高岡金屋に移住したのが始まりで、鍋、釜、鉄瓶、五徳、農耕具などを鉄から作っていた。幕末には製塩釜やにしん釜、梵鐘なども作るようになった。

銅器と言うようになったのは、1873（明治 6）年のウィーン万博が契機である。ヨーロッパでは鉄器よりも銅器が人気らしいと聞き、国の力を借りて銅器を生産・輸出する方針に変えたのだ。このとき、明治維新で幕藩体制が崩壊し、藩に雇われていた職人があぶれて高岡へと流れ、加賀藩や富山藩の技術も吸収された。

軌を一にして江戸時代から隆盛が続いているのが高岡漆器である。高岡城が廃城となったため、武士のためのものは作れなくなり、代わりに作られるようになったのが高岡仏壇である。やがて、「ぬしや八兵衛」の技術を取り入れ、さらに石井勇助が勇助塗という技法を編み出した。金蒔絵を作ると加賀藩ににらまれるため、別の方向で工夫していった結果でもある。これらの金工と漆工の技を総動員したのが高岡の御車山である。

その後、富山では美術品としての工芸ではなく、産業としての工芸に転換していった。その一番大きな部分が染織である。昭和人絹、呉羽紡績、呉羽化学工業、東洋紡績などの紡績工場が展開し、工場生産によってさまざまなものが作られていった。今も紡績工場が富山に残っているのは、街道筋に最も近い所で染織が展開して、新潟方面にも中京地区にも京都にも送ることができたからである。つまり、日本海とは全く無関係に、街道を使って流通していったのである。そして高岡では高岡捺染が展開し、一時期盛んに作られていた。高岡漆器も大正以降は、モダンなお盆や剥き蜜柑型火鉢などの量産型の製品が作られていった。このように富山の工芸品は産業化へと向かっていき、古い作り方を近年まで続けていた新潟や石川、福井とは随分性格が異なる。

しかし、そうはいつでも昭和 50 年代には、今では見ることができないような工芸品がまだ残っていた。現在、庄川木工はまだ残っているが、かつてほどの生産量はない。その流れで福光で行われているのが野球のバット生産である。福岡菅笠は技術を伝えるだけで商品化は不可能な状態である。富山木象嵌は、中島家 1 家が引き受けている形で、地域の特産工芸とはいえない状態となっている。富山土人形は顔も随分と変わってしまった。五箇山焼もほとんど廃絶状態である。魚津や小杉では瓦生産が盛んだった時期があったが、今は廃れてしまっている。八尾和紙は 1 店が頑張っていて、五箇山和紙も同じ状況である。

結局、残るべくして残った富山の工芸品は、産業としての工芸だった。その理由としては、常に加賀藩との対比、あるいは加賀藩からの制約や有形無形の圧力があったことが大きい。現代作家の可西泰三氏のように、技術的には高いものがありながら、装飾に凝るよりも、使っているうちに分かる人には分かる良さの品を作り続けている。つまり、きらびやかな装飾はせず、質の高い素材を使って精度高く作り上げ、作り手の都合だけでなく使い手のことも考えた実用性のある洗練された美を求めるのが、富山の工芸全般の特徴である。石川のきらびやかさや福井の武骨さとも違う。いかにより良く作るかを課題としてきたからこそ、工業生産品になってもその良さが生きているのである。

そう考えると工芸の場合、影響し合ったり技術や物を運んだりするには、日本海よりも陸路の方が大きく関わっているといえる。富山は新潟、金沢や京都、中京圏などさまざまな文化の交差点に存在しており、その環境に囲まれながら質実なものを作り続けてきたといえる。